

それに就て一場の逸話がありますが、文治が頭取を勤めるやうになつた頃の事、藏前の師匠と呼ばれて勢力のあつた三代目柳枝の弟子に、柏枝といふ若い男がおりまして、これが師匠の引立により眞打格に昇進することになりましたが、なか／＼素咄で看板を上げる程の力量はない。幸ひ役者の聲色が巧いとあつて、芝居斬で道具を使つたら、どうにかお茶が濁せるだらうといふところから、その稽古をしやうとなつた時に、就ては誰かに教はらなくてはならない。そこで柳枝が、

「それなら文治さんに頼みな。然しあの爺さんなか／＼皮肉だから、そのつもりで……」

と注意をした。柏枝は心得て菓子折を手土産に、文治の所へ頼みに行く。

「ア、さうかえ、よろしい」

と引受けて置きながら、オイツレとすぐには教へてくれません。稽古のけの字もしさうな氣振さ

へ見せず、終日を世間話で費やし

「今日は時間が半端だ、又明日おいで」

と申しました。そこで柏枝が翌日行くと、今朝湯へ行つてゐますから

と家人が申しますので、歸りを待つてゐるとなか／＼歸りません。暫らく経つて綺麗な顔をして歸つて来て

「イヤどうもお待遠さま。歸りに理髪屋へ廻つたから遅くなつて済まなかつたね。然しモウ今日は時間がない明日おいで……」

と又無駄足、柏枝も根氣がいゝ、又その翌日行きますと

「ア、生にく今日は座敷でね……」

その次の日は

「今日はより合へ出かけるから」

又あくる日は

「今日から晝席があるんだよ」

といつたやうな具合、又明日／＼とお断りが幾日も幾日も續きました。大ていの人間なら呆れていやになつちまふところを、柏枝も腹の中では口惜しかつたが、こゝが我慢のしどころだぞと、毎日／＼無駄足を覺悟で辛抱よく文治の所へ通ひつゞけました。

文治と文樂 (二)

習ひ度いといふ一心で、柏枝の方も強情でしたが、文治も負けずに強情を通し、毎日／＼、今日留守、今日は差聞えと、なかなか稽古にかゝりません。その間に、三日に一度は柏枝の方でも、手ぶらでは行かれませんが、何かしら手土産を持つて行くといふ勘定、収入の少ない割に、家業がら出錢の多い若い藝人の懐ろとして、これは相當の苦痛だつたらうと思はれますが、それを受取る文治の方は、氣の毒さうな顔もしません。遂に

その無駄足／＼が、何と一ト月も續きました、さすがの柏枝も少々あぐねて、

(成程こりやア大へんな爺だ)

と驚きました。すると恰度一ヶ月目のある朝のこと、それも夜があけたばかりの早晩に、柏枝の家の門口を、ドン／＼叩いて起すものがあります。夜遅くなる家業の落語家ですから、朝はどうしても早くは起きません。柏枝はまだ白河夜船の最中を叩き起され、

「ヘエ、唯今、どなたでございます。唯今、／＼、少々お待ちなすつて……」

と寝ぼけ眼をこすりながら、柏枝が表の戸をあけるとこは如何に、立つてゐたのは外ならぬ文治でした。柏枝はアツと驚いて

「マア師匠、大さうお早く、どちらへ」

「どこへ行くものか。お前の所へ来たんだ」

「ヘエツ、何か御用で……」

「何か御用ぢやアないよ。柏枝さん、私アお前の根氣のいふのに感心したよ。大ていの者なら、三日もスヤを食ばせれば、閉口して引下るんだが、お前はよくも飽きずに通ひなすつた。その熱心な物になる。お前の辛抱強い精神に免じて、芝居断を教へて上げる氣になつた。サアこれから稽古をしやう」

と申しました、柏枝は不意を食つて二度びつくり、

「左様でございますか、それは〜。有がたう存じます。然しそれにしても、唯今御飯をたかせますから」

「いゝよ〜、御飯なんざア喰ひたくない、すぐに始めやう」

とズン〜上つて参りまして

「ア、お前さんの家には女房さんがゐたね」
「へエ、子供も一人あります」

「ア、さうかえ、それではその子供と一緒に、かみさんをどこかへ出しておしまひ。他に誰かゐると、氣が散つていけないから」

と申しました。それに逆らつて折角の、御機嫌を損じてはならないと思つたので、柏枝はまだ起きたばかりで顔も洗はない女房に、小兒を連れさせて親類のところへ出してやり、

「へエ、師匠、二人きりになりました」

「ア、さうかえ、それでは表の戸をしつかりとめて、心張棒をかつておしまひ、誰か来られると邪魔になる。裏口もその通りだよ。留守のやうに見せかけるんだ。サアいゝかえ。これから稽古だが、芝居断をするには断よりも身振の仕付が第一それもむづかしいのは立廻りだよ。高座へ座つた儘形を見せるのだが、本當の事を知つてゐなくては、どうしてもヨク（嘘）になる。今日はその立廻りを本式に稽古しやうと思つて、私はその心組

で来た。少し骨も折れやうが、そのつもりでおか

よりよ

と文治が申します。

「どうもいろ〜有がたうございます」

「それではお前裸におなり」

「エツ、裸になるのですか」

「ア、さうだよ。着物なんぞ着てゐては駄目だ。最初は寒くともやつてゐる中には、御方便なもの

でだん〜暖かになる。裸におなり」と襦袢もぬぎすて、文治も同じく下帯ばかり、これから立廻りの稽古を始めましたが、その訓練の

激しいこと、柏枝は息もつけません。成程全身汗みづくになつてポツポ〜と湯氣が立ちます。柏

枝は忽ちヘト〜になりましたが、文治はピシ

〜と鞭撻を加へ、まだ〜、まだ〜と激励します。柏枝は空腹も甚だしく目が廻りさうだ。

「師匠……御飯を……」

と非鳴をあげますと

「イヤ飯なんぞを、食べてゐる間が惜しいな。お茶漬でもあつたら、鹽をつけて、結びにしな

さ

握り飯をこさへさしてムシヤ〜やり、すぐと

又立上つて稽古を續けました。これが朝から日暮まで一寸の猶豫もなく、猛烈にやつたのですか

ら、さすがに文治も疲れたらしかつたが、柏枝は尙のことクタ〜になり、終ひには座敷へ打倒れ

てしまひました。そして文治の歸つた後も、全身綿のやうになりました、廁へ入つても、節々が痛

んで、しやがむ事さへ出来なかつたと申します。その夜は死んだやうになつてグツスリ眠ると、又

その翌朝ドン〜戸を叩かれた。見ると文治が、
「サア又やつて来たよ」
と立つてゐました。

文治と文樂 (三)

今度は柏枝の方で、その熱心さに膽をつぶしましたが、文治はニコニコ笑ひながら、「サア早く、かみさんと子供を外へお出し、稽古だ〜」

と促しました。この稽古が三日もつゞき、お蔭で柏枝は充分に、本格の立廻りを、腹へ入れる事が出来ました。一ト通り形を覚へたところで、今度は坐つてその形を真似る。半身でやる藝も、本行を心得てゐますから、立派に形もつく譯なのであります。柏枝はつらい思ひをした代りに、豫期した以上の藝を教はることが出来、感激して其好意を感謝したこと申す迄もございません。この柏枝こそ現存の入船亭扇橋老で、以上は同人の直話であります。かくてこの文治は明治四十一年十一月、大阪の文團治に七代目文治をゆづり自分は樂

翁と改名、更に三世大和太掾になりましたが、同四十四年二月十七日六十六で永眠、法號は桂月院釋家元文治居士と申し、戒名にまで家元と入つて居ります。今の八代目文治はこの六代目の義子で、祖先を語る由緒の品々も藏して居ります。ところでこの、六代目文治の門人に、文七といふ人があり、本名を新井文三といつて、柴井町で印刷屋を営んでゐましたが、好きから素人連へ入つて鶴丸亭小きんと名乗つてゐたのが、遂に本職となつた。そして文七から文鏡となり、頗る巧いので人氣を博し、看板に上つて四代目文樂をつぎました。明治二十六年の番附を見ますと、西の大關に位して居ります。その前に一時、幫間に向向して島原で松の家文二、吉原で荻江文三と名乗つた事もあつたさうですが、それだけに圓轉西脱、氣の利いた扮装態度で、話風も輕妙を極め、如何にもオツな味がありました。假聲は半四郎を得意で使

ひ、話は音羽丹七、雪の瀬川など、花柳界を舞臺にしたものが矢張り巧く、

「眞に江戸の落語を聞きたくば、文樂を聞かなくてはいけない」

といはれた程で、とりわけて幫間の出る話は、眞を寫して眞似の出来ないところがありました。

ちよつと今昔譚から引用しますと

「雪の瀬川で、居候の若旦那から瀬川への手紙を言傳つた源助といふ男が、怪しげな扮装で、吉原の幫間富本米太夫のところを訪ねると、折しも朝湯から立歸つた米太夫は、源助に向ひ、これは〜どうも、わざ〜恐れ入りました、へエ〜若旦那からのお手紙で、へイ、委細承知仕りました。どうも御苦勞さまでございます。成程これが若旦那のお手紙、どうもお珍らしい、へイ、米太夫でございます。御機嫌よろしうと手紙をちよいと頂き、ちよいと縁喜棚へ上げてと、手紙を供へ

それでは、すぐと行つて、御返事を頂いて参ります。どうか御ゆつくりと、と、源助へ酒肴を出すことを、女房に目くばせで命ずるところなど、人物が活躍し、其情景を目の前に見るやうであつた」

とあり、又、

「文樂は幫間をしてゐた關係上、きわめて料理の事に精通し、又、頗る食道樂であつた。従つて何の話でも、必らず食物の事の出ぬことはなく、それから、デコ〜といふ口ぐせがあつたので、デコ〜の文樂と呼ばれ、これが綽名になつた。明治十四五年頃の事だが、文樂が芝の恵智十へかゝつてゐると、木戸へ打揃つて入つて來たのが、新橋の、久吉、しん子、千代助、小文、とく松、宮子、友江などの連中で、ちよいと看板を見ると、アラマア、ヘラ〜かステテコかと思つたら、デコ〜よ。つまらないわねえと引返さうとした。

すると恰度其時木戸に居合せた文樂が、この言葉
を聞いてムツとしたが、そこは暫間で苦勞をして
來た彼のこと、屋根船の乗り方はどうと心得てゐ
る通人だから、グツと碎けて、もし姉さん方、御
意には叶ひますまいが、今夜だけはデコ／＼も聞
いて行つて下さいよと聲をかけたので、藝妓たち
も今更後ろは見せられず、嬌笑に紛らして入場し
閉場まで聞いて歸つたが、さすがは新橋の一流ど
ころだけあつて、翌晩はお客を連れ出してこの連
中が、又惠智十へ押かけ、文樂へ後ろ幕を贈つた
と、當時の諸藝新聞に出てゐる云々

尙、増田龍雨氏の隨筆によると

「文樂は、柳原堤の印判屋の主人で、いつも店先
でコツ／＼と、認印や實印を、注文に應じて彫つ
てゐるが、話がしたくなると寄席へ出る。然しイ
ヤになると一年も二年も席へ出ないといふ異りも
ので、勿論大看板、この人圓朝燕枝に伍して、と

いふより、わたしの記憶に間違ひがなければ、よ
り以上にたしかな藝であつたと思ふ。得意に演じ
た本郷小町などは、木原亭で、連夜一人の客も立
たせなかつたのでも、藝のちからが分る。わたし
が人情話といふものに打込んだのもまた、この人
の藝の力に引づられたからだ」
とありました。この文樂は明治二十七年五月二
十八日五十七で歿し、法號を桂眞院宜説文樂居士
と申します。

放牛舎桃林

「本所に過ぎたるものが二つあり、津輕大名、炭
屋鹽原」

これは有名な鹽原多助のことを詠んだ狂歌とし
てありますが、同じ頃、矢張り立志傳的人物で
芝居の金方として成功した大久保今助といふ人が
あり、今一人、萬屋和介と三人を合せて江戸の三

助と稱へました。同じ三助でもお湯の流しで幅を
利かせてゐる番頭さんとは大分違ひますが、この
三助の一人萬屋和介と申しますのは、深川木場の
材木の大門屋で世間では一ト口に萬和と呼び、唯
今の深川區萬年町海邊橋を、昔は深川寺町の正覺
寺橋と申しましたものですが、其横手を入つた冬
木町の河岸を、俗に萬和河岸と呼んだ程音に聞え
た名家でありました。その萬和所有の地所が、京
橋の本八丁堀と南八丁堀とにありましたので、そ
の差配をしてゐましたのが谷口忠兵衛といつて南
八丁堀の蜷河岸に住み、岸和田の岡部家へも出入
りして町人の元締をしてゐた有力家でした。この
谷口忠兵衛が母方の苗字を名乗つて島と改姓し、
島忠兵衛といつて男女三人の子があり、長女はお
竹、長男は勝五郎、二男は泰次郎といひましたが
この泰次郎は後に左右助と名を改め、十八の時に
謡曲家長命勝五郎の養子になつて、寶生流の謡を

寶生金五郎に學び、幸流の小鼓を幸清次郎に習
ひ、精進をしたが又實家へ戻る事になつて今度は
講釋師を志し、師匠と仰いだのが前に申した初代
東流齋馬琴であります。馬琴には其折も述べまし
た如く數多の門人がありましたが、左右助はその
三十一人目の弟子になつて琴曲と號し、追々人に
も認められて來ましたところ、馬琴は大阪で亡く
なり何しろ社中が多いので苦情や紛紜もあり、琴
曲はそれを煩はしく思つて獨立した。この時に岡
野龍叟といふ儒者の先生が琴曲の爲めに名をつけ
ましたのが、漢籍の書經から撰んだもので、周書
の中考定武成の章に、

「乃チ武ヲ偃セ文ヲ修メ、馬ヲ華山ノ陽ニ歸シ、
牛ヲ桃林ノ野ニ放ツ」

とありますその句に因んで、放牛舎桃林といふ
名でありました。出典も明かですし、文字も立派
で大さうな雅名であります。琴曲大に喜んでこの

名に改めた、勿論初代であります。この桃林は文字もあり風流を好み、俳諧は深川佐賀町にゐた小築庵春湖の門に入つて遅々庵香波と號し、春湖の歿後は其角堂永機の弟子になり、又川柳を六代目川柳に學んで祥雲と名乗つたとの事、淺野長動侯の御愛顧を受け、水戸黄門記の内、藤井紋太夫お手討の條で、寶生流の諺を中へちよつと入れてお聞きに入れたところ大さう御褒めにあづかつた。これは其筈で諺曲は本職の修業をしたのだから素人離れがしてゐる譯でせう。師匠の馬琴も弟子が多かつたが、この桃林も門人が多く、桃玉（揚名舎）、桃葉（秦々齋）、桃湖（放牛舎）、桃海、桃水、桃里、桃山、桃勝、桃和、桃溪、桃花（初めは力士にて鬼風喜左衛門の弟子、後に二代目桃葉となり、更に三代目馬琴となる）桃花女、桃左衛門、桃一、桃仙、桃窓、桃園、桃拾、桃枝、桃長、桃々、大桃、桃紅、桃成、桃壽、桃櫻、桃庭

桃源、桃條、桃李、桃八、桃雨（後に二代目桃湖更に六代目陵湖となる）桃甫（後に現在の二代目桃川若燕）桃泉、二代目桃玉、二代桃水、二代桃源、二代桃海、二代桃里、二代桃山等、實に夥しい人數で、この他、落語家から講釋師になつた二代目桃葉も居ります。この人は本名を神尾鐵五郎といひ初めは三代目五明樓玉輔の弟子で五輔から五海道雲輔になり、更に怪談師になつて人情亭錦紅を襲名、それより桃林の門に入つて三代目桃葉となりましたが、落語家の出だけあつて世話物に獨特輕妙の味があり、講釋好きに喜ばれて代々の桃葉の中ではこの人が一ばん賣れたでせう。次手ながらこの秦々齋桃葉といふ名も漢籍から出た名で、詩經の中に「桃ノ天々タルハ其葉秦々タリ」とありますのから取りました。桃林の名と好一對と申せませう。さて初代桃林に倅があつて光澤

いふばかりなり。これが辭世でありました。

伊東燕尾

次郎と申し、これが後に二代目桃林となりましたが、家庭に於ける躰方は嚴格を極めたもので、我子といへども同席で食事をさせない。女中と一緒に臺所で食べさせ、又飯櫃の上へ種本をのせて稽古をさせ「早く飯の食へるやうな一人前になりたくば、一心に修行をしろ」と教へたさうで、自身も夜遅くなる家業でありながら早く起き、机に向つては書き物をした。この隨筆が次第にたまつて三十冊程の大部の書物になつたのを「波の子」と題し、田村成義氏へ譲つて同家の藏本となつたとの事、又、葛飾五人男、延命院、白藤源太、纏の譽、新藏兄弟、仙石騷動大久保今助傳等自身創作の講談も少なからず、田沼、吉原百人斬、吃又平等を得意とし、明治卅年八月十四日、六十四歳で歿し、麻布飯倉一乗寺へ葬り法號性靜院桃林日善信士「筆なげて月にも

明治の年代に出ました講談落語速記雜誌の中、歴史も古く又年月も永かつたのは「百花園」であるにせう。今日にありましては斯道研究上に貴重なる文獻の一つでありますが、この百花園などを見ますと講釋師の肖像中、烏帽子を戴き束帯を着け、威容堂々として異彩を放つてゐる人物があります。頗るむづかしい顔をした、やかましさをなさうなお爺さんでこれなん初代の伊東燕尾であります。赤ら顔で上背があり、肥つてゐるから力士かと思はれる程の大兵な體格で、若い時は總髮の大たぶさ、伊東といふ姓に因んだ庵に木瓜の定紋ついたる黒の羽織に、脇差も小長いのを一本さしてゐたところ、どう見ても天晴れの大劍客といふ風采、素晴らしく立派だから往來の人は振り返つて見送

つた程だと申しますが、元來この人は武藏の國秩父郡北川村の産で黒田鐵太郎といひ、お父さんは上野寛永寺の炭薪御用を勤めて居りましたが、この鐵太郎の生れたのが文政十二年四月の八日、即ちお釋迦様の御誕生と同じ月日だからといふところから、佛縁のある者に違ひないゆえ、出家にしようといふ事になり、少年の頃から上野のお山へ上せ、凌雲院寛潤僧正のお弟子にして修行をさせたのですが、どうも鐵太郎には坊さんの生活が性に合はない。

「どうか男子と生れたからは、士農工商とて四民の上に立つ武士になりたい」

といふ考へを起し、有馬玄蕃頭の家臣で淺山一傳流の津田武太夫に槍術を習ひ、戸田越後守十二世たる氣樂流の菅沼勇之助に柔道を學び、追々上達に及んだので

「この上はいよいよ武者修業に出やう」

と面小手を肩に秩父へ志し、同所中野の代官笹本彦次郎方に逗留、いよいよ秩父の山中へかかりましたところ、途中で筑後柳川の藩士大石進といふ、道場荒しで有名な腕きまに出くわし、

「貴公面小手をかついでゐるところを見ると、武術の修行だな。こりやアたのもししい。恰度いゝから一本立合はふ」

と試合を挑まれました。據なく渡り合つたがどういたしまして、叶ふ筈はない散々に引ばたかれた上

「何だこのさまは、こんな未熟な腕前で、諸國遍歴とは生ぬきな奴だ。察するところ、師匠から許しを受けての修業ではあるまい。こらしめの爲めに道具は取上げるぞ」

面小手竹刀みんな持つて行かれちまつた。鐵太郎弱りぬいて又も中野の陣屋へ引返し、笹本代官から詫びて貰つて道具は取返しましたが、モウこ嵐を起す事などがございます

と聞いた燕尾、

「へ、エそいつは面白い、よし、乃公が一つどんな事になるか試めして見やう」

と眞裸になつて飛込みました。一同アツと驚いて見てゐる中を、得意になつて泳ぎ廻り

「それ見る。何のさわりもなからう」

と上つて来て威張つてゐたところ、

「飛んでもねえことをする奴だ。こんな狂人をいつ迄も此土地に泊めておくと、どんな御神罰があるか分らねえ」

とばかり、とうとう一同で燕尾を此土地から追拂つちまつた。などといふ事もあつた位兎に角餘程の變りものだつたに違ひなく、明治の初年に斷髮令が出まして、燕尾も自慢の大たぶさを取拂つてしまはねばならぬ事になりましたが、サアこれが惜しくてなりません。

り／＼だと一度で武者修行をあきらめ、これから講釋師になる氣になつた。この邊は前に出ました初代南龍によく似て居りますが、その間にも長州征伐の時、榊原隊に加はつて八王子同心の百人長となり、いよいよ出發といふ時寒胃で動けなくなつたことやいろ／＼ありますが、結局伊東燕晋（一説には燕凌ともいふ）の弟子になつて燕尾と名乗り、地方廻りから叩き上げ、散々苦勞をした甲斐があつて場敷をふんだ達者になり、東京の講釋場へ現れるや間もなく一方の大看板になりましたのは素養と實力が物を言つたものに相違ありません。何しろ若年時代に地方廻りをしてゐた頃、上州榛名の温泉場へ参り、湯治をしながら講釋を讀んで相當に繁昌してゐましたが、ところの者から

「この榛名の湖は靈水でありますから、ちよつと人が手を入れまして、水神様がお腹立ちになつて

「ア、何たる情ないことだ」と七日泣いたと申します。然し切らない譯には行きません。據なく切りは切つても未練がありますから、長く残して後ろへ撫でつけにし、二月目位に散髪をしてゐたとの事、この人の長所は前に出た文車とは又ちがつた行き方ですが餘事が巧かつたことで、講談に引事つまり餘談はつき物でもあり、それが面白味のある所ですが、素養や力量がないとなか／＼これが巧く出来ない。ところが燕尾のはこれに妙を得て而も長いと來てゐました

伊東燕尾 (二)

それからそれへと枝に枝が出て引事が一席で済まず、翌る日へつゞいて又次の日へも跨がるといふ具合、本文なんぞはどこかへ行つてしまふ位でしたから、それが爲め他人には一日の分量を、燕尾は三日も五日もかゝつたさうで、その引き事が

又面白いから、聴衆も喜んで入りがありました。本郷日蔭町の講釋場後の梅本へ出たときに席主が「どうして先生は義士傳を讀まないのです」と尋ねましたところ燕尾が、

「イヤ私も講釋師だから、義士を知らない譯ぢやアないが、他の先生が皆なこれを讀むから私はわざとよけてゐたのだ。然し所望とあるなら讀まうよ」

といふ事になり

「どうぞお願い申します」

「ア、よろしい。それでは今夜から討入を讀まう」

「エツ、先生最初から討入ですか」

「ア、さうだよ。餘人と違つて私の討入は長いから……」

といひましたが、聞いて見ると成程その長いこと、そも／＼の初日から、義士の討入を讀み始めて、イヤこれが續くは／＼、いつ迄たつても筋が

進行しません。といふのは例によつて引ごと澤山義士の一人が吉良の附人と立向ひ、チャリオンと刀を合せたかと思ふと、これがスグ脇道へ入つて、兩方の生立ちからその他の引事に入り、急には勝負がつきません。二日も三日もかゝるといふ具合だから、これでは手間もとれる譯、とう／＼一ヶ月経つて千秋樂の晩になつたが、まだ／＼結末のつくどころか、討入も中途のところだ。その時に伊東燕尾が聴客に對つて、

「さてお聞きの通り、吉良の附人四天王の一人清水一學もまだ討死してゐない。況んや目ざす敵の吉良上野介に至つては、無事息災安穩で存命してゐる。これを炭部屋から探し出して首級を擧げ、兩國橋で服部一郎右衛門に出會の一件から泉岳寺の引揚げ、義士のお預けから十八ヶ條申開き、一同切腹までやるのには、まだ六十くさりはタツプリかゝる」

と言つた。これには聴衆も呆れたといひますが討入を讀んで吉良の首を討たずじまひにしたのはこの燕尾ぐらいのもの、高座振りも變つてゐて、時計が流行つて來ると燕尾も懐中時計を求めたがこの時計の大きいこと直徑四寸もあつて周圍が八角になつてゐやうといふ、柱掛も兼用出來さうな大型で、これを紫縮緬の帛紗に包み、提靴の中へ入れて持つて歩いた。この靴の中には、張扇から扇子から種本一切入つてゐる。本は厚く綴じた大部のもので、メリンスの帛紗に包み、張扇と扇子とは筒へ入れてありました。この包と筒を中番に釋臺へ上げさせ、高座へは枕を用意し、自分は例の大時計を携へてノツシ／＼と高座へ上り、枕を尻の下へあてがつてムンツと着席、先づ机の上左りの方へ、時計を置くのが例となつてゐましたが斯うやると大さう時間觀念があるやうだが、豈はからんや此時計飾りものでちつとも役には立なな

い。
「先生、今日はアシに願ひます」
「よろしく」

と受合つて而も時計を睨みながら演つてゐるのだから、短かく切つて下りるかと思ふとどういたしまして、一時間が一時間半になり二時間たつても下りないといふのは、高座へ上ると藝に熱中して下りるのを忘れてしまふのです、何の爲めに時計をもつて上るのか分りませんが、もつとも其筈で、時計は正直に動いてゐるのだが、先生時間の見方が分らない。長針の方はお構ひなしで、短針の方はばかり見てゐるから、一時間や二時間は何とも思はない譯だ。時間が分らないで時計を持つてゐるには當りませんが、この燕尾と前に出た初代桃林ばかりは、一生涯時間が分らずじまひ、それでも桃林の方は見方が知れないからといふので時計を持たなかつたからまだしもですが、燕尾先生

分らないくせに、高座へまで昇ぎ出したのだから變つてゐます。そしては藝に熱中して下りるのを忘れ、時間が遅くなつて次の席で文句を言はれたりすると

「ウーム何その、ちよつと時計が狂つてゐたものだから」

などと時計のせいにしてしまふ。時計こそいゝ面の皮で、何しろ大兵で大力と來てゐますから、時々重い釋臺の兩端へ雙手をかけ、ウームと差上げたり何かしては、聴衆をびつくりさせた事などがありました。恰度明治三年のこと、この燕尾が上野廣小路の本牧亭へかゝた。この本牧は即ち、現在の鈴本の前身で江戸時代から有名な席、向ふ側に金澤といふこれも名代の菓子屋があり、金澤の向ふ河岸だから洒落て本牧とつけたのだといひます。往來から木戸を入ると左り手に高座がありまして、高座の後ろは一開のはき出し窓になつて

ゐる。その後ろには六尺幅の大溝があつて、溝を越した後ろにあつた家に住んでゐたのが邑井貞吉即ち後の邑井一でした。

伊東燕尾 (三)

これが夜のことと聴衆は一杯の入り、燕尾は慶安太平記を讀んでゐましたが例の引事に入つて盛んに劍道の事を話し、自分もやつたことはあるのだから心得もありますので、詳細にいろ／＼辯じてゐると、高座のすぐ前に座つて、聽いてゐましたのが年の頃十八九、色が青白く眼尻のつるし上つた大たぶさの若侍で、これがだしぬけに突立上り、刀の柄へ手をかけながらズイと進んで「イヤ燕尾先生最前から承はるところ、貴方は餘程のお使ひ手と心得る。さもなくしてはなか／＼それ迄に劍道のこと辯ぜられるものではない。察するところ一流の達人に相違ござるまい。拙者は

車坂に道場を構へる伊庭軍兵衛の伴、サア立上つて尋常のお手合せを願ひ度い、勝負〜」

と嗷鳴りました。イヤ不意を食つて燕尾が驚いたの驚ろかないの、講釋最中尋常の勝負を申込まれたのはこの人ばかり、而も若侍は一寸の猶豫もなく、長い刀をガラリ引こぬき燕尾の目の前へツバツと突きつけたからサア大變、満場はワツといつて總立ちになる。燕尾はキヤツと叫びさま、ボンと高座の後ろへ飛んだといふと、如何にも身が軽いやうに聞えますがさうではない。實はころがり落ちたのです。それも本人大兵の身體で、高座の後ろのはき出し窓へ、ドシーンと打突かつたからその重みで竹格子が折れる。はづみを食つて今申したその大溝へ、眞逆様に落ちたのは酷い目に遭つたもので、溝泥のハネがサーツと上る、これがモロに貞吉の家の障子へかゝつた。實に近所も災難で、貞吉の女房もだしぬけだからびつくりし

た。ハツとして障子をあけて見ると、燕尾先生泥だらけになつて這上り、助けてくれと悲鳴を上げてゐます、寄席の方は大騒ぎで、スグと下足が車坂の道場へ駈出して行き、急を知らせたから、伊庭の師範代や門人が七八名驚いてかけつけ、漸くの事で一刀をもぎとつたが、この若侍は自分でも名乗つた通り、正に伊庭軍兵衛の倅には相違ないのですが、餘り剣道に熱申した結果精神に異状を來し、座敷牢へ入れてあつたのを、家人の隙を窺つていつの間にか脱け出し、本牧へ入つてゐたものと分りました。狂人で而も大小を持つてゐるのですから、こんな物騒な話はありません。他の聴衆は半分も逃て歸り、あとはワア／＼と騒ぐばかり、それが爲めに狂人は尙のこと逆上して「燕尾はどこへ行つた、サア勝負をさせる」と叫び廻るのを、門人たちがやつと表へ連れ出し道場へ送り込んで又監禁しましたが、燕尾は貞

吉のところ湯を沸かして貰ひ行水を使ふやらえらい騒ぎ、翌日になると伊庭から、御主人の軍兵衛先生自身に本牧の木戸へ、詫びに見えましたのはさすがに物を心得たえらい人物、伊東燕尾はこの騒動が縁故になり、其後伊庭の道場に何かある時は招かれて餘興を勤め、出入りをしたさうですが、

「實にこの時ほど、怖かつたかつたことは生涯を通じて初めてだつた」

と後によく申しました由。燕尾は非常な大酒家で、その好みがあつたのか、これも大酒で評判の竹本此勝といふ女義太夫と夫婦になり、狸々のやうな夫婦だと言はれましたが、大酒の他にはこれといふ道樂もなく、客取りで収入も多かつたから相當に残つた。それを毎月／＼秩父の郷里へ送つたのは、両親の爲めに山林田畑を求めて餘生を安樂にくらさせやう爲めでありました。ところが其

後燕尾が歸郷して見ると、いろ／＼手違ひがあつて大きに失望落膽、淋しい晩年を送りつゝ秩父の山中に六十七か八で歿したのも運命と申しませうか。さればこれ程大看板であつた燕尾も終りを詳かにいたしませんのは残念なこと、桃林とは兄弟同様に親しくして、講談組合に初めて頭取を設ける事になつた時、初代の頭取に推された桃林が、合頭取に選んだのはこの燕尾と前に出た二代目伯山でありました。ところがこの三頭取とも算盤が分らない。其頃中等業者の月税二十五錢宛でしたが、これを五十人分其筋へ納めるのに、サアいくらだか分りません。兩國にあつた福本といふ講釋場の二階へ三人が集まつて鹿爪らしい顔に向ひ合せたが、國民學校低學年の生徒でも分りさうなこの問題が見當もつかず。

「ア、その爲めに算盤があるのだ」と階下の帳場から十呂盤を借りて來て、先づ伯

山が二十五と置いて見たものの、これをどうしていゝのか分りません。それを桃林と燕尾の二人がもつともらしく傍から覗いてゐる圖なんでものは珍中の珍だつたさうですが、今度は二十五を五十だけ並べて見やうといふ事になり、

「とても一挺ちやア足りないよ」と階下へ又十呂盤を借りにやつた、一體どんなむづかしい勘定かと上つて來た福本の席主が譯を聞いてブーツと吹出し

「お三人とも講釋は名人だが、こんな事にかけてはカタ無しだね。二十五錢が五十なら十二圓五十錢ちやありませんか」

と忽ち解決して下りて行つたので、三人とも顔見合せ、

「ウームあの男は算盤の名人だな」と感心したといふのですから振つて居ります。あまりナンセンス過ぎて、嘘のやうであります

實話として傳はつてゐるところ、以て其頃の犬先生たちの半面がよく分らうと思ひまして、ちよつとお取次いたしました。

○燕尾の門人、伊東燕尾は門人多からず、玉梅、燕泰、燕徳等に過ぎざりしが、燕徳は本名吉野歌治とて二代目燕尾をつぎ又、玉梅は燕旭堂と改め、その以前は東玉の弟子にて東潮といひしが、異り種の講釋師にて奇行多く、伴二人の中、一人は岡本貞二郎とて新派の俳優となり、今一人は講談師にして貞朝より後に二代目清草舎英昌となりしが何れも物故せり。

春錦亭柳櫻 (一)

講釋師落語家の藝名も、多種多様でいろいろあります中に、出典も正しく調つて居りますのは、講談の方で前に述べた放牛舎桃林、或は秦々齋桃葉、落語の方ではこの春錦亭柳櫻でございます。申す迄もなく

「見わたせば、柳さくらをこきまぜて、都ぞ春の

以て柳橋の看板であつた事が察せられます。至つて濃厚篤實な、物堅い人物で、藝に熱心な外は物事に無頓着な好々爺だつたとのこと、聲は細いが愛嬌があり、地味で落つてゐて、頗る巧く、なんのかんのといふ口癖があつたと申します。住居に因んで不動新道の師匠と敬稱され、後に長男の小柳橋に四代目麗々亭柳橋をゆづり、自分は柳叟と改めました。間もなくこの春錦亭柳櫻といふ名を選んだ次第、この長男四代目柳橋は、本名を龜吉といつて十四の年から高座の人となり、五年目には真打になつて、道具を使つての人情噺が大に人氣に投じて入りを取つたといふ天才兒、聲色も巧くて數を知り、とりわけやさ形の美男でありましたから、大さう評判になつたもので、嘘か眞實か、この柳橋に戀をして、麗々亭柳橋と大書した一枚ピラを抱き、入水した若い娘があつたなどと傳へられて居ります。就中、その座り踊に

錦なりける」

といふ和歌から選みましたが、風流でもあり、且つ優美であります。而して初めてこの名をつけました人物は、前に出ました三代目柳橋、即ち安政の大地震に、二代目柳枝のお蔭で命びろいをしたといふ、逸話の主の晩年であります。そもこの人は、本名を齋藤文吉といひまして、京橋槇町の家主であつたといふこと、元より好きでこの道へ入り、初めは瀧川鯉かんの門人で、鯉之助から鯉橋になりましたが、その後二代目柳橋に師事して桃流と改め、嘉永五年三代目柳橋を襲名明治八年四月には、落語組合の頭取に推されました。この頭取を最初に勤めたのが、前に出ました名人の圓朝で、その二代目がこの柳橋であります。それから三代目頭取が、これも前述の六代目桂文治といふ順序、その後の代々は後に申上げます。地位と人望がなくては頭取にはなれませんので、

至つては、他の追隨を許さぬ程、鮮やかなものであつたとのこと、落語に「子別れ」又は「子は鏡」と題し、飲んだくれの亭主が、働き者の女房を追出し、後に改心して堅くなり、子供の媒介で、目出度く元の鞘へ納まるといふ人情咄がありますがあれも柳橋が得意でやつた。そしてあの子名を龜ちやんと申しますのは、とりも直さず自分の倅、この四代目柳橋の實名龜吉をその儘使つた譯で、今以て誰がやりましたも、あの話の子供は龜ちやんといふ名になつて居ります。二番目の子は（本名嘉吉）幼名を昔々亭桃太郎といつて落語をやりましたが、後に講談に轉じて、前にも出ましたが三代目貞山の門人となつて貞宗と名乗り、更に貞山が一山と改めるや自分も一仙と改め、木戸一錢の小夜講で義士傳を読み、クシ形の高張提灯や立看板を出して景氣を添へ、綽名をクシ形と呼ばれたりしましたが、一山の歿後、初代の如燕の門人

となつて若燕じやくえんから、更に二代目桃川如燕となつて先年歿ごつしました。桃太郎ももたろうに始まつて桃川に終るなど、餘程桃ももに縁えんのある先生と思はれます。三番目の末子は本名久吉、小柳から後に柳櫻りゅうおう、また柳橋と改め、氣の毒にも大正の震災に本所被服廠ひつぷくじやうあつて殉難じゆんなんいたしました。それは後のお話として、斯様な具合に親子四人が、揃そろつて高座の人であつたのも珍めづらしい事で、従つて家内中かだいちゆうがより合へばどうしても藝げいの話はなしになります。時には父親が知らない話を、我子わがこに教はる事もあります。昔むかし氣質かちつの人は違ちがつたもので、柳櫻りゅうおうもさういふ時には下手へ下り、我子を土へ座すわらせて、自分は敷物敷物を拂はらつて謹聽きんちゆうしました。これは

「我子といへ、物を教はるからには師匠ししやうだから、といふので、其禮儀そのれいぎを守つたものなのですが物堅ものかたいことで、その上話を聴ききながら、おかしい時には腹はらを抱かかへて笑ひ、悲かなしいところでは涙なみだを流

し、首くびを傾かたけて聽きいて居ります。そこ迄そこはいゝのだが、濟すんでしまふと以前の位置かゝに戻り、今度は叱言こゑごをいつたさうで、

「これお前まへたち、今私がお前方の話を聞いて、泣いたり笑つたりしたが、あれはお前たちの、話方が巧うまいから、受けたのだと思ふと大違ちがひだよ。ア面白いよく出来た話だ。こゝはかういふ具合に話せば聴衆きゆうしゆうが笑ふだらう。こゝはかう突つ込こむと、皆みな泣なかせて見せるがなアと、私わたし自身がやる時の工風くふうをしなから聽きいてゐるので、自然と吹出ふきだしてもすれば涙なみだも出るのだ。決してお前たちの藝げいに感じたのではないから、自惚うぶれてはいけないよ、いくら若いにしても、成なつちやアゐないや、拙ちやくすぎらア」

と訓戒くんかいしたさうで、話をさせられたり、叱しられたりしては合あひませんが、これは我子わがこを慢心まんしんさせまい親心おんしんでありましたらう。藝熱心げいねつしんはこれでもよ

く分わかります。

春錦亭柳櫻 (二)

柳櫻は自身みづかみに創作さうぞくの才も幾分いくぶんあり「阿部川原風仇浪あべがわはらふうあつらなみ」などを自作自演じやくじやくえんいたしました。多くは良齋種りやうさいしゆの續つき咄はなで、とりわけ「白子屋政談しやくしやせいだん」「四谷怪談しやちやかいだん」などは、最も得意とくいとした十八番じやくはちばんでありました。次手ついでながら人情話にんじやうわで演えんじます四谷怪談しやちやかいだんは、南北作なんぼくさくの歌舞伎狂言かぶききやうげんとは大分筋立おほいぶんすぢだてが違ちがつてゐまして、良齋りやうさいが大體事實だいたいじじつらしくまとめた原作げんさくへ、柳櫻の作意さくいも大分加くわはつてゐるのだと申まをします。その柳櫻りゅうおうがまだ柳橋時代りゅうきやうじだい、麴町むくぢやうの萬長まんながといふ寄席よせへかゝつて、四谷怪談しやちやかいだんを演えんする旨こころのピラを張り出だしましたところ、得意とくいの出でし物ものだから初晩はつばん以來いらい毎夜まいやの大入おほいり、何分なんぶんにも物堅ものかたくて信仰家しんやうかの柳橋りゅうきやうだから、この話を演えんする時には、必ず毎日まいにち、お岩いわた荷に様さまへ参詣さんぎして勤こまめて居ゐましたが、恰度てうどその七日目ななひめのこ

と、どうにも差支さしつかへが出来て日参にっさんが出来ない。柳橋は心に濟すまぬと思おもひながら、遙拜えうはいだけにして樂屋入がくやいりをしましたが、何なにだか氣きが落おつきません。その中に時刻じこくが來きましたから高座こうざへ上あつて、昨夜けつやの續つきを話はなし始め、次第しだいに佳境がきやうに入いらうといふ時になつたところ、突然とつぜん客席きやくせきに當あつて、ガラガラジーンと怪あやしい物音ものねがした。場合ばあひが場ば合あひに聽き客きやくも柳橋りゅうきやうも、愕然がくぜんとして上あを見み上げましたが、この物音ものねは天井てんじやうの明あり窓まどが、どうしたはづみかだしぬけにあいた響ひびきだつたのであります。夜風よかぜが冷々ひやひやとその窓まどから吹ふき込み、空そらには星ほしの光ひかりも見みえず。全體ぜんたいどうしてこの明あり窓まどがあいたのだらうと、早速さつそく席せきの若わかい者ものが、屋根やねへ登のぼつて檢しらめると平素へいそは堅強けんぢやうな細引こゝろひきで締しめてあるのですが、何者なにものの所ところ爲なとも知しれず、ごく鋭利えいりな刃物やいばで切きつたかの如ごとく、その細引こゝろひきが物の美事みじにブツツリと切斷きつだんされ、其爲そのために窓まどがあいたものと分わかりました。それでな

くとも、不安な心持で恐々辯じてゐたところへ、思ひ設けぬ怪異な出来事が起つたのですから、柳橋は見る／＼青くなつて、膝さへガタ／＼と慄へ出し、

「お客様方何ともまことに相済みません。實は今日無精をしまして、お岩様への日参を怠り、氣にかゝつて居りました折柄、これは確かにその罰でございます。それでも構はずに話を續けたら、この上どんな祟りがあるかも知れませぬ、お客様方に御迷惑をかけたしましては相済みませぬ故、何とも恐れ入りましたが、今夜はこれまでにして、御勘辨を願ひたう存じます。私は明日早速お岩様へ、お詫びに伺ひ、念の爲めにおみくちを頂いて見ます。幸ひにもよろしいといふお告げができましたら先を續けさせて頂きます故、今晚は半札で御不承を願ひます」

と詫びを申しました。聴衆も眼前に怪異を見

て、異様な心持になつてゐたところですから、いづれも無氣味な目と目を見合せ、落ちつかぬ心持に襲はれつゝ、苦情も言はずに打出しになりました。その後で柳橋も萬長の席主も、互ひに青ざめた顔を緊張させながら、どうしたものだらうと大息をつき、兎に角明朝は早くから、お詫参りに行かうといふ事になりましたが、萬長の主人は「それでは師匠一緒に行きませう」といふのを

「イヤそれはいけません。お前さんはこの席主、私は諸方の席へ出る藝人です。私にお咎めがあつたのか、それとも此席に障りがあつて、こゝでやつてはいけないといふお知らせを頂いたのかどつちだか分らない。一緒にお参りをしておみくちを引いたのではその解決がつかないから、私は私、お前さんはお前さんで、兩方別々に行かうではありませんか」

「成程、それもさうだ。では別々に……」

と約束もきまり、柳橋は不安の裡に一夜をあかして、翌朝は自宅から、ちか／＼お岩様へ参詣して、昨日不参のお詫をした上、

「この先同じ話をして打つゞけてもよろしいものでございませうか、どうかお告げを願ひます」

と祈願をこめ、あらためてお神籤を引きましたところ、出ましたのは第何番かの大吉でありました。柳橋は初めてホツと安心し、喜び勇んで萬長の席へ行きますと、席の主人は「足先へ参詣したと見え、モウ歸つてゐたところでありました、そして

「柳橋師匠喜んで下さい、大吉が出ましたよ」

と頂いて来たお神籤を見せたから、柳橋が受取つてあけて見たら、何と驚いたことにそのお神籤は、柳橋の頂いたのと同じ番號でありましたから、柳橋は又もや襟元から冷水をかけられたやう

にゾーツとしましたが、萬長の席主も今更きもをつぶし、

「さて／＼神ごととは争へないものだ」とつく／＼感心したと申します。

「然し揃ひも揃つて、同番號の大吉が出るやうでは、差支へないに違ひないから、早速今夜から續けやう」

といふ事になり、其趣を張り出したり、チラシをまいたりしたところ、何分前夜の一件が知れ渡つてゐた折柄とて、一層好奇心をそそりまして、此興行連夜大入大當りであつたと申します。つまり今日で申せば、好個の宣傳になつた譯ですが、その時分は何も、宣傳などといふ頭があつての仕事ではなく、律義の心配が偶然にも廣告的效果を招いた次第でありませう。

そんな具合で、柳橋が四谷怪談をやれば、いつも人氣を呼んで大入を占めました。晩年、柳橋になつた頃は、これをやると却つて客の数が減るやうになりました。本人も氣にしている／＼考へましたが、やがて自分で思ひ當り、

「これは成程、客も來ない譯だ。鏡に向つて見る迄もないこと、此通り老人になり、至つて恐い顔の私が、若い時分と違つて、色氣も愛嬌もなくなり、只凄味ばかりが深くなつて、恐ろしい話をするのだから、これではお客様も、いゝ心持はしなからう、木戸錢を出して、氣味の悪い思ひをさせられては合はないからねえ」

と悟つて、それからは精々愛嬌を出し、成るべく賑に凄味を薄して演じたら、又聽客もふえるやうになつたと申します。これはよく己れを知るものと申すべしで、矢張り名人の心意氣すべて非凡なところがあります。これも寶井馬琴老の談に

よると

「柳橋は年をとつて後引退の披露をいたし、その日／＼を氣樂に送る、隱居の身の上になりましたが、中橋の松川といふ講釋の寄席、こゝは横町の自宅からはすぐ傍でもあり、身體が閑だから始終木戸錢を拂つて聽きに來ました。高座へ出る講釋師連中も、皆な知合の間柄だから、師匠何も木戸を出して聞きに來るには及ばないぢやありませんか、いくら引退したつて、何もせずに遊んでゐるのは勿體ない。小遣かせぎに講釋の中へ出てはどうですと勧めたところ、當人も段々その氣になりましたが、然し私は落語家のこと、どうも皆さんの中へはと遠慮をした。ナニお前さんは續き話が巧いのだから、講釋の中でも差支へはありませんよ。お出なさい／＼と勧められ、柳橋だつて元より好むるところ、それではといふので、お鳥目は兎に角、身體が退屈だからと此松川へ出たの

が始まりで評判になり、皆から私の方へもスケてくれ、來月は私の方へと、段々にたのまれてズツと講釋場へ引つゞいて出ました。人情話の續き物と、講談とは同じやうで大さう行き方の違ふところがあります。それを兎に角大家揃ひの講談席へ、柳橋が一枚交つて出演し、充分に聽客へ満足と與へたので、剛儀なものであります。元より、シト／＼と物柔かに運んで行く續き物です。から講談のやうに烈しくはないが、ヤンワリと巧味があり、白子屋政談などでも、彌太五郎源七が上總無宿の入墨新三を手にかける、閻魔堂橋の仕返しから、足のつくのを恐れて居酒屋の老人夫婦を殺害するといふ件、かういふ所は少々意氣組の弱いところもありましたが、その代り家主の長兵衛が、無頼漢の新三を脅して、白子屋から強請つた金を二つ割にして持つて行く條など實に手に入つたもので、上が十兩に下が五兩、鯉は片身貰つて

行くよといふあの呼吸、眞似も出來ない程の妙味がありました。この話は默阿彌翁が歌舞伎に仕組んで、仲藏の家主で大當り、その後は名優の松助がこの役で天下一品といはれました。名題は梅雨小袖昔八丈この原本は全く、この柳櫻の人情噺で家主と新三の應對と來たら、聽客を引くり返したもので、ます／＼評判がよろしく、一順講釋の席を廻り、二度目に松川へ出たのがお名残り」

云々とありました。かくて中橋の住居で歿しましたのが、明治三十年八月十一日、時に行年六十九歳、淺草門跡地内神田山徳本寺に葬り、法號は藝名を其儘、春錦亭柳櫻居士と申しますが、年月こそ違へ、圓朝、燕枝、柳櫻と同じ十一日に亡くなつて居るのも奇縁でございます。

○落語の頭取、初代は三遊亭圓朝。二代目は麗々亭柳橋後に改めて春錦亭柳櫻、三代目は六世桂文治、四代目は四世三遊亭圓生、五代目は初代談洲樓燕枝、

六代目は三代目春風亭柳枝。七代目は四世麗々亭柳橋、八代目は四世柳亭左樂、九代目は三遊亭小圓朝、十代目は橋家圓藏、十一代目は四世春風亭柳枝（後の華柳）。十二代目は五世柳亭左樂、それより十三代目の當代一龍齋貞山に至る。

あとがき

講談落語名人誌の稿を起してより、一冊に全編を輯録すべき意圖なりしも、次第に枚数を費してまだ半ばに達したに過ぎません。わづかに明治期に入つたのみで、まだあとには、講談の部に、花樂の陵潮、燕林の實、のんく南龍、名人の一、その子貞吉、或は吉瓶、馨やら、伯知やら、本編中にも談話を引用して資料と仰いだ馬琴老やら、次郎長の三代目伯山や、貞水、如燕、芦洲、典山、貞山、南龍さでは痴遊、風谷、越山等、最近の諸名家に至る迄、一方落語の部に於ては、圓生、圓橋、鼻の圓遊、禽語樓

圓馬、圓左、圓喬、小さん、圓右、左樂、圓藏、扇歌、小圓朝、圓、橋之助、燕枝、小勝、三語樓、乃至、扇橋、小さん、文樂、金語樓等、現在の面々に至る、諸家の列傳や目まぐるしき程の、沿革消長を語るには、尙以上の分量を要することと思はれますので、これは後編にゆづりますが、こゝに一言いたしたきは、この書物を著した目的が、唯この道の事を、調査研究せらるゝ方々の参考資料たらしむるためにありますこととこゝに選んでのせた傳記中の人々は、皆それ〴〵一世に名をあげた、成功者の話ばかりゆえ、これだけを見ますと、講談師落語家などは、割にやさしく立身が出来るものと、早合點をする讀者がないとも限られず、年少子弟を過る事ありはせずやと、いさゝか老婆心より憂慮もいたされます。どういたしまして、この反面に於て此道の、失敗者落伍者はどの位あるか

分らず、一生を碌々と、下積みを終つた不遇の藝人の方が、數に於ては多いのでありまして、その中の何十分の一か、何百分の一かの少數の人々が、どうか物になり得たのみに止まります。即ちごく選ばれた、天分ある特別の人が、非常な努力と苦勞とによつて、辛うじて此列傳中へ入れた譯なのでありまして、決して誰でもなれるわけのものではありません。むしろ他の方面に於て、こゝに至る迄の苦心と努力をしたらもつと早く、もつと容易く、どれ程立身も出世も出来て世の中の爲めになれたか分らないと思ふ程であります。それはマア何の業でも同じではあります。所謂勝てば官軍とやら、成功したればこそ、先生とか師匠とか、世間でも認めませうが、その位置まで行かれなければ、残念ながら輕蔑を以て遇せられても文句のいへぬ家業であります。近頃でこそ、藝能人とか、藝

術家とか申しますものの、昔は藝人といつて下等視され、堅氣を去つて藝人など志望すれば、勘當はお定まり、親類縁者からは義絶をされるものに極つてゐたのを見ても分ります。よほど天分のあるものに非れば、講釋師や落語家などを志すものではありません。要はこの書中の名人大家たちが、その盛名を得るに至る迄の、忍耐と精進との精神を學び、これを各自の行く道に應用して頂きたいのであります。念の爲特に吳々も、此點を力説して本編を了ります。



(出版會承認 4260070號) 3,000部

昭和十九年四月十五日印刷
昭和十九年四月二十日發行

本朝話人傳
定價壹圓六拾錢

著者 野村無名庵

發行者 和田鼎
東京都神田區小川町三ノ一四

印刷者 柿崎林之助
東京都神田區三崎町二ノ九

發行所 協榮出版社
東京都神田區小川町三ノ一四

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區神保町二ノ九
振替東京七七二一
電話神田〇八〇六
會員部號一〇七〇八七

東京三一九八

終



¥160